



彩の国
埼玉県

彩の国の道徳（小学校高学年）
夢にむかって

埼玉県教育委員会

3 父の思いを受け継いで

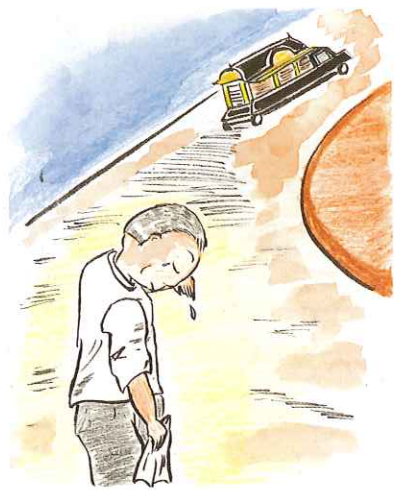
二〇〇八年、北京オリンピック開幕まであと一か月という七月六日に、川口市の鋳物師鈴木文吾さんが八十六才で亡くなったことがニュースで伝えられた。毎年十月十日が近づくと東京の国立競技場を訪ね、オリンピックの聖火台を濃紺のはつぴを着て、ていねいにみがいていた。今年も八月のはじめにみがこうと、それを楽しみにしていたという。

一九六四年の東京オリンピックでは、その前哨戦となるアジア競技会（一九五六年）に間に合わせるために、聖火台の製作をしてほしいという依頼が、当時最高の鋳物職人と言われた鈴木萬之助に舞い込んだ。萬之助は文吾の父である。

しかし、二トン半の聖火台を作るには、今ある枠の三倍以上の重さのものを作らなければならない。当然、工場も広いところを借りないといけない。依頼を受けてから残りの期間は、わずか三か月。さすがにどんな腕利きの職人でも、無理と考えられていた。ところが、萬之助は、

「おまえがやる気があるなら、この仕事を引き受けるぞ。」と、息子の文吾に言った。

た。
（親父はちよつと疲れているからね。明日くらいにはまた行くから、がんばってくれよって、兄さんが言っていた。親父が死んだなんて、夢にも思わなかった。）



文吾は、がつくりと肩を落とした。父の死の知らせを聞いたのは、父が倒れてから一週間後。親が死んでしまうことがこんなにも悲しいとは思わなかった。胸がいっぱいだった。

（けれど…時間がない。）

作業場にもどり、父と誓い合ったあの時を思い出していた。

（川口のため、国のため、親父のためにもがんばるぞ。）

父の思いを受け継ぐことを心に決めた文吾



「国の仕事ができるのは、名誉なことだ。金銭的には全く採算は合わないが、鋳物師の仕事はお金じゃない。」
父のこの言葉を聞き、文吾は悩んだ末、
「親父と二人で必ずこの仕事を成し遂げよう。」と、心に決めた。

聖火台は、直径二・一メートルにもなる大きな作品である。文吾は広島まで行って、大きな鋳物の造り方を学んだ。限られた日数の中、懸命な作業が続く。しかし、溶けた鉄が噴き出してしまい、湯入れは大失敗。作業は一からすべてやり直すことになった。萬之助はショックで寝込んでしまった。この二か月間、寝食を惜しんで働き続けた父を思い、文吾は一人で作業を続けた。

ある日、作業をしていると、同じ工場ではたらいっている人がやってきて、

「よう、鈴木さん、親の葬式なのに、お焼香もしないで、工場で仕事かい。」

と、声をかけた。何も知らされていなかった文吾は、びっくりして仕事着のまま、真っ黒な顔で、急いで自転車で自宅に帰ると、ちょうど葬式が終わり、父を乗せた車が出るところであつた。

は、兄たちにも手伝ってもらい、一週間寝ずに作り続けた。

ついに念願の聖火台が完成した。重量感のある、大きな大きな聖火台である。聖火

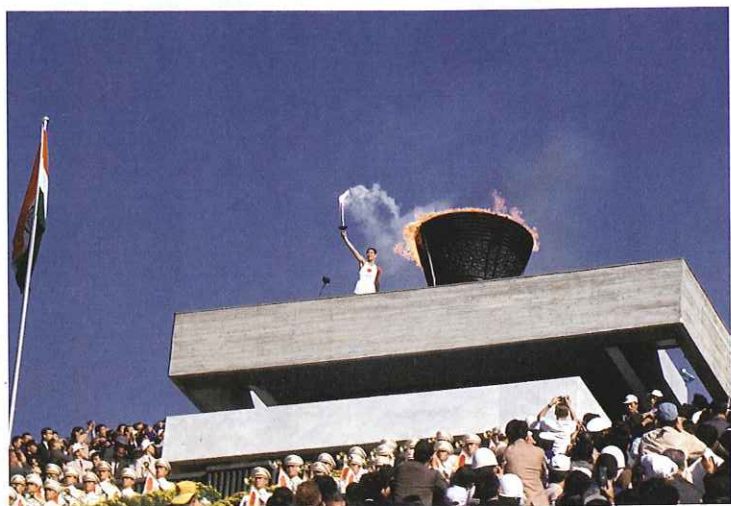
台の中に、父親の名前を略した『鈴木萬』を刻み込んだ。

「親父、できたよ。」

ようやくでき上がった

たその聖火台を前に、ひとすじの涙がこぼれた。

一九五六年、東京で行われたアジア競技会に引き続き、一九六四年十月十日、文吾が作り上げた聖火台に聖火がともされ、東京オリンピックは開幕した。



(C) PHOTO KISHIMOTO

*前哨戦…本番の試合の前に行う予備戦
*湯入れ…溶かした鉄を砂型に流し込む作業

埼玉県道徳教材資料集（小学校高学年版「夢にむかって」）

○監 修 尾田 幸雄 お茶の水女子大学名誉教授
高島 元洋 お茶の水女子大学大学院教授
押谷 由夫 昭和女子大学大学院教授
蛭田 政弘 文教大学教授
鈴木 賢一 元埼玉県道徳教育研究会会長

○協 力 堺 正一 立正大学教授
宇宙航空研究開発機構 J A X A

○写真提供 熊谷市教育委員会
さいたま水族館
さきたま史跡の博物館
渋沢史料館
永井機械鑄造株式会社
本庄市教育委員会
（表紙）清水 勉

発 行 埼玉県教育委員会（平成22年2月）
編 集 埼玉県教育局県立学校部生徒指導課
〒330-9301 さいたま市浦和区高砂3-15-1
TEL 048-830-6745
FAX 048-830-4952
E-mail : a6740@pref.saitama.lg.jp